

# 『風俗遊仙窟』における仙境

——異郷訪問譚の一変化——

付 曉 靈

一 はじめに

仙境、竜宮、鬼国、酒吞童子の住処など通常ではない場所を訪れる話型が、古くから日本に存在する。それを先行研究に従い、異郷訪問譚と称する。

異郷訪問譚に関する主な先行研究として、上代については勝俣隆『異郷訪問譚・来訪譚の研究』<sup>(1)</sup>、中世については市古貞次「異郷小説」<sup>(2)</sup>などの研究がある。近世の異郷訪問譚は社会的文化的背景の変化に伴い中世以前とは異なる様相を呈しているが、伝存資料の膨大さが一因となり、それらを網羅的に取り上げた研究は現れていなかった。

そこで、筆者は前稿<sup>(3)</sup>において、江戸時代前中期における異郷訪問譚に関する資料を、仮名草子、浮世草子その他小説類、草双紙に分けて収集整理した。本稿は、その中で調査し得た作品のうち、克齋著、寛延二年（一七四九）<sup>(4)</sup>、江戸池田屋源助によって刊行された『風俗遊仙窟』（半紙本四巻四冊）に着目する。前稿の調査範囲における作品は、短編集の一部に異郷訪問譚を含む場合<sup>(5)</sup>と、長編小説の一部に異郷訪問譚を含む場合<sup>(6)</sup>が殆どである。その中にあって、『風俗遊仙窟』は、全四

巻を通して一話の異郷訪問譚を描く珍しい作品であり、日本の異郷観の系譜を考察する上で欠かせない資料であるためである。

本書の梗概は、以下のものである。張川文蔵、通称文生が仙郷に迷い込み、衣を洗う女童に一夜の宿を求めめる。さらに、久米仙人、久米姫と和歌・詩文・発句などのやりとりをする（巻一、巻二）。その後、文生は久米仙人の入婿になる。文生に家を継がせたことを諸仙へ広めるために、久米仙人が宴会を催す。宴会に諸仙が来儀し、妙術を顕すが、東王公と西王母が現れ、墮落した生活をしている仙人らを叱る（巻三）。頽れた久米仙人の死を経て、文生は久米姫と一緒に俗界に戻る（巻四）。

『風俗遊仙窟』は『遊仙窟』を踏まえた小説であるが、狂文や狂歌、狂詩、発句等も織り込まれ<sup>(7)</sup>、狂文戯作<sup>(8)</sup>としての側面を持つことが指摘され、原典にない滑稽性や世相風俗の描写を含む。また、『風俗遊仙窟』は後世に一定の影響力を有しており、先行研究においては、本書が『風流仙人花智』（富川吟雪画、安永三年（一七七四）刊）の粉本であり、「黄表紙の成立に本書が間接的に関わった」<sup>(9)</sup>ことや、『風流志道軒伝』（平賀源内著、宝暦十三年（一七六三）刊）に示唆を与えた可能性<sup>(10)</sup>

が指摘されている。本作の著者克齋は伝未詳ながら、その著述『蛙の物真似』（享保十四年（一七二九）刊）は談義本の祖の一と目される<sup>（十一）</sup>。従って、『風俗遊仙窟』の詳細な分析は、異郷訪問譚研究のみならず、影響作の分析より広い戯作研究に寄与すると考えられる。

中国唐代の小説である『遊仙窟』は、奈良時代以来、日本文学に多大なる影響を与え、慶安五年（一六五二）、元禄三年（一六九〇）に和刻本が出版されるなど、江戸時代に入っても受容され続けている。『風俗遊仙窟』における『遊仙窟』の利用は、特に巻一、巻二の構想と表現において顕著である。

一方、『風俗遊仙窟』の序文は、『遊仙窟』以外の、仙人の世界について知るための書物を挙げている。しかしながら、それらの本作における影響については従来研究がない。また、『風俗遊仙窟』巻三は仙人社会に関する記述を有するが、この一連の記述は、『遊仙窟』に見えず、先行する異郷訪問譚にも見出せないため、典拠研究と異郷訪問譚研究の双方において、注目に値する。

本稿では、『風俗遊仙窟』における中国の仙人伝記の利用について検討し、『風俗遊仙窟』における仙人社会がどのように構築されたかを検討する。さらに、主人公が仙境を出る結末に注目し、同じ話型の作品の調査を通じて、『風俗遊仙窟』の特徴を把握しつつ、異郷訪問譚の一変化の様相を呈示する。

## 二 『遊仙窟』以外の素材——『有象列仙全伝』

『風俗遊仙窟』の黒羊子<sup>（十二）</sup>による序文に、『遊仙窟』以外

の書物に言及する部分がある。

文載<sup>レ</sup>道之器也とは。大八車の謂にはあらず。伝<sup>レ</sup>悉々<sup>一</sup>。

著<sup>二</sup>暗々<sup>一</sup>とは。暗夜に鳥銃の事にはあらず。況乎神仙之術。升<sup>レ</sup>天練<sup>レ</sup>気。神変奇特。片言隻字の可<sup>レ</sup>尽にあらず。

昔者。劉向。李攀竜之選。文字に角ありて。嗜人鮮矣。此書や。其味を碌々の徒に為<sup>レ</sup>知度とは。作者の微志也。

〔風俗遊仙窟〕序

序者は「神仙之術」について知るための書物を挙げ、それらが漢文体であるために限られた人にしか読まれていないことを述べ、本書には、このような先行書の「味」を多くの人に知らせる意図があるとす。

傍線部において、序者は書名を明示せず、「劉向」、「李攀竜」のような人名のみを示している。「劉向」は中国漢代の学者であり、ここは彼の名に仮託した仙人伝記集の嚆矢『列仙伝』を指す。『列仙伝』が古来日本文学に多大なる影響を及ぼしたことは周知の通りであり、江戸時代にも寛永年間、寛政年間に和刻本が刊行された。「李攀竜」は中国明代の古文辞派の文人で、ここでは彼の名に仮託した<sup>（十三）</sup>中国明代万曆二十八年（一六〇〇）刊の肖像入り仙人伝記集『有象列仙全伝』（以下、『列仙全伝』九巻を指す。本書の収録仙人数は五百八十一名であり、『列仙伝』の約七十名に比して膨大である<sup>（十四）</sup>。『列仙全伝』は江戸初期に伝来し<sup>（十五）</sup>、慶安三年（一六五〇）に和刻本が出版され、寛政三年（一七九一）に序文を補刻した後印本もあり、近世日本に広く影響を及ぼしたことが知られる<sup>（十六）</sup>。先行研究は、本書が故事集、画題集成書、日本の仙人の伝記集に引用されることを指摘する<sup>（十七）</sup>が、当時の創作、特に小説での受容はいま

だ検討されていない。

さて、『風俗遊仙窟』巻三には、西王母の発言に以下のような内容が見られる。

「むかし①巫炎。②漢武帝に③涇橋に出会。④廿五迄はなはだ病身なりしが。仙道を得て。身体強健氣力わかき時より莊にして。それより⑤三十六人の子共を出来し。⑥百三十八歳になるとの手形咄し」

『風俗遊仙窟』巻三）  
巫炎は中国漢代の人物であり、仙人とされている。彼の伝記は『列仙伝』には見えないが、『列仙全伝』には収録されている。

①巫炎、字子都、北海人。②漢武帝出遊③涇橋④。見下子都頭上有二紫氣、高丈餘上。帝召問曰、「君年幾何」。炎曰、「臣今已⑥百三十八歳」。帝問、「有何道術」。炎曰、「臣年④二十五時、苦腰脊疼痛脚冷、口中乾苦、舌燥涕出、百節四肢皆痛、足痺不能久立」。得此道以來、已百十三年。有二子⑤三十六人①。身体強健、氣力輒勝②壯時①。〔列仙全伝』卷二「巫炎」

『風俗遊仙窟』と『列仙全伝』の内容が酷似している。まず、傍線部から確認できるように、人名①「巫炎」、②「漢の武帝」、場所③「涇橋」が一致する。また、細部の数字もすべて一致している。たとえば④病弱であった頃の巫炎の年齢はともに二十五、⑤子供の人数はともに三十六人、⑥現在の巫炎の年齢はともに百三十八歳となっている。

以上の「巫炎」の例を含め、中国の仙人伝記の要素・表現を利用したと考えられる箇所を表一にまとめる。

表一 『風俗遊仙窟』と中国の仙人伝記との対応箇所

【凡例】

1. 表一は、『風俗遊仙窟』の本文と、それに対応する中国の仙人伝記の本文を示した。なお、仙人伝記の利用は、『風俗遊仙窟』巻三のみに確認できる。

2. 仙人伝記の本文の引用は、便宜的に『列仙全伝』による。

3. 最下行に『列仙全伝』以外の、該当仙人伝記を収録した漢籍を示す。仙人伝記自体が多数の漢籍に収録されるが、『風俗遊仙窟』と細部要素・表現上の一致を考慮し、それぞれ以下の基準で該当資料を絞った。

- ①「妹」、「麻姑神人」の表現を含むものに限定。
- ②「松江鱸」、「蜀薑」、「蜀中生薑」の表現を含むものに限定。
- ③「蘭麝之香」、「数里」の表現を含むものに限定。
- ④「上天下地」、「男子」の表現を含むものに限定。
- ⑤「不移」、「有三虫」の表現、桓景の説話を含むものに限定。
- ⑥「穆王」、「為大夫」の表現を含むものに限定。
- ⑦「陶朱公」、「億万」、「財」、「蘭」の表現を含むものに限定。
- ⑧「致竜蛇」、「入水不濡」の表現を含むものに限定。
- ⑨「身体強健」、「氣力」の表現を含むものに限定。

以上に挙げた表現について、該当本文に傍線を施した。

4. 調査対象とする漢籍は、『風俗遊仙窟』刊行以前の作品に絞った。

※左慈が松江の鱸を釣り、蜀の薑を出す故事を収録した漢籍は、表一以外にもあるが、『風俗遊仙窟』との対応箇所が二つ以上ある」という基準で該当資料を絞った。

番号 所出	①	②	③	④
『風俗遊仙窟』卷三	あるとき文生と久米姫双六を博けるが、文生しきりに脊のかゆき事あり。戯れて姫に搔て給はらんやと。いひければ。姫大に息巻て。「むかし蔡経といへる。わやくもの。王方平が妹の麻姑に出あひ。其手の鳥の爪に似たるを見て。背痒をかきたらば。心よからんとおもひければ。方平。経が背をしたゝかに鞭て。麻姑は神人なり。汝何ぞかゝる無礼をおもふとて大には鞭おもひけるとかや。文生さだめてわれをも麻姑にかはらぬ蹴爪とおもひ給ふにや（後略）」	そのとき左慈といへる仙人。「我むかし魏の曹操に招れて。参会のおりふし。曹操松江の鱸膾を望れしかば。即席に釣得たり。責て近江の源五郎鮒にても任らん」と。庭前を杖にて穿てば。忽に。池となり水滔々と涌出る。その中より大なる鮒五つ六つを釣あげ。序に蜀の壘にはあらねど腥膻の独活めを懐よりころ／＼と出せば。	虚空に音楽聞へ。蘭麝の香散里の外に薫し。	「上天下地男子登仙得道の者は。先木公を拜し（東王公ナリ）。女子の登仙するものは。金母を拜す（西王母ナリ）」
『列仙全伝』	麻姑即方平之妹也。（中略）麻姑手似鳥爪。蔡経私念。「背痒時得此爪搔之。佳」。方平即知。乃鞭経背曰。「麻姑神人也。汝謂其爪可搔背痒耶。（卷三）蔡経」	操嘗宴賓曰。「今日高会。所少松江鱸耳」。慈因求銅盆貯水。以竿釣之。即得鱸。操曰。「恨無蜀壘」。慈曰。「易得」（中略）須臾袖中出薑。（卷三）左慈	復有妓樂余竹金石之音滴耳。蘭麝之香達散里外。（卷二）茅盈	木公（中略）亦号東王公。凡上天下地男子登仙得道者。悉所掌焉。（中略）凡品仙昇天之日。先拜木公。後謁金母。受事既畢。方得昇九天。入三清。先拜木公。謁元始。漢初有群兒戲謔於道曰。「着青襪。上天門。搗金母。拜木公」。（卷一）木公
他出	〔元〕『歷世真仙傳道通鑑』、『鐵崖詩注』、『明』、『大明一統志』、『嘉靖江西通志』、『統文獻通考』、『三才圖會』	〔晉〕『搜神記』、『南朝宋』、『後漢書』、『元』、『歷世真仙傳道通鑑』、『明』、『大明一統志』、『統文獻通考』、『三才圖會』※	〔清〕『恒岳志』	〔明〕『三才圖會』

表一(続き)

番号	所出	『風俗遊仙窟』卷三	『列仙全伝』	他出
⑤	<p>「むかし費長房公に隨て。仙道を字ばんとて深山に入し。荊棘の中を裸でくぐらせ群る虎の中に処しむ。されども長房はを不恐。また一つの。あき屋へ入て臥しむ。寝たる上の梁に朽たる帯にて。大盤石を釣置は危事いはんかたなし。またあまたの蛇来て此帯をねふり齧切らんとす。されども長房猶心を不移。そのとき公采て善哉。子可教とて。また糞一へらを喰といふ。其中に三つの虫有。臭穢甚たへがたく。此一事はいかに仙術成就せずとも。しのびがたし。御免あれとかぶりをふれば。公公が日。子道を得べし。さりながら此一味を詠ざるゆへ。直に天仙とならざる事情むべしとて。家にかへらしむ。一の竹の杖に騎て。杖の行に任よ。家に至らば。杖を葛隙に投よと。をしへのまゝ杖に乗家にかへりて。則杖を破に投れば竜となつて飛去りぬ。それより長房。地仙となつて衆病を医療し。人の吉凶を先知る。」</p>	<p>於是遂隨翁入深山。踐荊棘。於群虎之中。留使狹処。長房亦不恐。又臥長房於空室。以朽帶懸万斤石於其上。衆蛇競來齧。欲斷。長房亦不移。翁還。撫之日。子可教也。復使食糞。糞中有三虫。臭穢甚。長房意惡之。翁竹杖。日。子幾得道。懼於此不成。奈何。長房辭歸。翁與一杖。日。騎此任所之。頃刻至矣。至當以杖投葛隙。翁與來。自謂去家適經旬日。而已十餘年矣。即以杖投破。顧視。則電也。(中略)遠能醫療衆病。鞭笞百鬼。驅使社公家有大災。可作絲囊盛藥。實擊。臂上。登高山。飲菊花酒。掃可消。景如其言。拳家登山。夕還。見牛羊鷄犬皆暴死焉。</p> <p>(卷四「費長房」)</p>	<p>〔明〕『三才圖會』</p>	
⑥	<p>「彭祖は。周穆王為大夫望ども出て仕へず」</p>	<p>穆王聞之。以為大夫。稱疾不與政事。</p> <p>(卷一「彭祖」)</p>	<p>〔漢〕『列仙伝』、〔宋〕『鄮峰真隱漫錄』、〔清〕『春秋戰國異辭』</p>	
⑦	<p>「陶朱公は。億万の財をすて。蘭陵に菓を売」</p>	<p>見於陶。為陶朱公。財有億万。復棄之。</p> <p>(卷一「范蠡」)</p>	<p>〔漢〕『列仙伝』、〔宋〕『鄮峰真隱漫錄』、〔清〕『春秋戰國異辭』</p>	
⑧	<p>「道成就に及んでは。坐致風雨。立起雲霧。画地為江湖。撮土為山岳。牧虎豹。致電蛇。役鬼神。入火不焦。入水不濡。鉄を以金とし。汞を以白銀とす」</p>	<p>一吾一人能坐致風雨。立起雲霧。画地為江湖。撮土為山岳。一人能崩高塞湖。牧虎豹。致電蛇。役鬼神。(中略)寒。暑熱不汗。入水不濡。刃之不傷。射之不中。冬凍不八石。飛騰流珠。(中略)一人能煎泥成金。蝦蛤為銀。水煉</p> <p>(卷二「劉安」)</p>	<p>〔元〕『歷世真仙傳』</p>	
⑨	<p>「むかし巫炎。漢武帝に滑稽に出会。廿五迄はなだ病身なりしが。仙道を得て。身体強健氣力わかき時より莊にして。それより三十六人の子共を出来し。百三十八歳になるとの手形咄し」</p>	<p>巫炎。字子都。北海人。漢武帝出遊滑稽。見子都頭上有紫氣。高丈餘。帝召問日。「君年幾何」。炎日。「臣今已一百三十八歳」。帝問。「有何道術」。炎日。「臣年二十五時。苦腰背疼痛脚冷。口中乾苦。舌燥涕出。百節四肢皆痛。足痺不能久立。得此道以來。已百十三年。有子三十六人。身体強健。氣力転勝壯時」。</p> <p>(卷二「巫炎」)</p>	<p>〔元〕『歷世真仙傳』</p>	

表一では、仙人伝記の本文の引用は『列仙全伝』によったが、該当伝記はそれぞれ他出がある。たとえば表一⑦における范蠡の該当箇所は、互いに類似した本文<sup>〔千〕</sup>が『列仙全伝』と『列仙伝』の両方にある。

また、他出として出現頻度が高い漢籍は、明の万曆三十七年（一六〇九）刊の類書『三才図会』百六卷である。本書は、日本の正徳二年（一七一二）序の百科事典『和漢三才図会』<sup>〔千九〕</sup>に影響を与えたことが知られる。『三才図会』には、『風俗遊仙窟』との対応箇所が五箇所（表一①②④⑤⑥）存在するが、表一③⑦⑧⑨については該当する箇所がない。

このように、表一における仙人伝記はそれぞれ他出があり、文言も一致するため、それらから一つずつ引用されている可能性もないわけではないが、『風俗遊仙窟』巻三に一貫する典拠として、九点の該当話をすべて含む『列仙全伝』が最もふさわしいと考えられる。

『風俗遊仙窟』の作者はどのように『列仙全伝』を利用したのか。その方法を二種に分けることができる。その一は、本文に仙人名があり、その仙人の情報やエピソードを述べる際に、『列仙全伝』の該当仙人の項目の記述を用いる場合である（表一①②④⑤⑥⑦⑨）。その二は、仙人名やエピソードと直接関わらない部分の表現を『列仙全伝』から借りる場合である（表一③⑧<sup>〔千十〕</sup>）。後者は、作者が『列仙全伝』を読み込んでいたことを示している。

本節では、『風俗遊仙窟』における複数の部分が、『列仙全伝』に由来する可能性が高いことを示した。次に、同書の利用を踏まえ、『風俗遊仙窟』における異郷の様相について考察する。

### 三 仙人社会法則の構築——仙人伝記における情報の応用

江戸時代以前の仙境訪問譚は、仙境訪問に関係する一、二名の少人数の仙人を描くものが多い（軍記『曾我物語』「費長房が事」、謡曲「楊貴妃」、御伽草子『すゑひろ物語』など多数）。『風俗遊仙窟』はそれらと異なり、作中に数多くの仙人を登場させる。仙人らは久米仙人が設けた宴に出席したり、久米仙人が死んだ後、葬送の準備をしたりしている。つまり、本書においては仙人の社会が創出されており、この点が従来の日本の仙境訪問譚に見られない本作の特徴である。本書の仙人社会には、一定の規則がある。

それは、まず東王公、西王母の登場場面から窺える。両者が宴会に登場する際、諸仙は、

すはや東王公。西王母の来臨あるはと。一座の諸仙肝を消し  
以外の外に周章し。俄に威儀を整。手を拱て拝すれば。着二  
青裙一たる老人。左右に侍衛の諸仙列をひき。又容貌美麗  
の仙女。锦衣綉裳あたりも耀よそほひにて。五人の侍女を  
前後にしたがへ庭前に降臨あれば。諸仙一度に頭を下げ。  
土に鼻をすり付る。時にあるじの久米仙進み出て。「かゝ  
る破屋へはるく御光臨。おもひがけなき仕合ありがた  
し」と感涙をながせば。

『風俗遊仙窟』巻三）  
とあるように、東王公、西王母に対して恭しい態度を取っており、両者を仙人社会の権力者として見ている。右の場面に続く両者の発言、

其時両仙曰く。「われらはるゝ此国に至る事全よの儀に  
あらず。世澆季に及。仙室の掟猥がはしく。皆々酒食に耽。  
淫欲をほしいまゝにし。太上老君の教を背き（太上老君ハ  
老子ナリ）己々が見識を立。術を以て樂とし。仙道を慰と  
覺へたる族多し。凡修レ仙者。黄帝老子を祖とし。上レ天  
下レ地男子登仙得道の者は。先木公を拝し（東王公ナリ）。  
女子の登仙するものは。金母を拝す（西王母ナリ）。しか  
るに近世はその沙汰みだりに。面々の弟子筋をこしらへ。  
奴婢のごとくに召使ひ。剩門弟入と号して。一ツ角の肴代  
を出させ。そのほか五節句の祝儀をとり。賄賂に耽ては未  
熟のものにも秘密の丹法を教へ（後略）」

『風俗遊仙窟』卷三

では、仙を修する者が黄帝老子を祖とすること、男子の登仙者  
がまず木公（東王公）を拝し、女子の登仙者が金母（西王母）  
を拝すべきことが述べられる。

また、両仙の台詞の末尾近くに見える、

「不レ見や久米仙。わづかの好色より。浮雲に蹶病仙とな  
りたるは。後車のいましめならずや。そのうへきけば太上  
老君へ願書をも不二三差出。みだりに俗人をよびいれ養子  
あわせの相談。旁以不届の至也。また久米姫も。父の命と  
はいひながら。西王母へ一ト通りの届もなく。俗間に嫁す  
ること。其罪、遁るべき所なし。向後は仙女の中ケ間。帳  
面はづれ成べし」

『風俗遊仙窟』卷三

では、太上老君（老子）へ願書を提出せずに俗人を呼び入れた  
久米仙人と、西王母に届けを出さずに俗人と結婚した久米姫が  
咎められ、久米姫は仙人仲間から排除された。

さらに、巻四の地の文、

文生仙人の譲は受ながら。いまだ東王公へ。継目の御礼沙  
汰もなく。また久米姫も西王母の咎をうけ。夫婦共に天竺  
浪人の身となり。 『風俗遊仙窟』巻四

では、文生は久米仙人の後継者となったものの、東王公へ「継  
目の御礼沙汰もな」い状態であり、久米姫も西王母の咎めを受  
けたために、夫婦が流浪の身となったことが述べられる。

以上の傍線部から分かるように、『風俗遊仙窟』の仙人社会  
の描写には、男仙と女仙がそれぞれ東王公、西王母の管轄下に  
あるとして区別する意識が見られる。

こうした趣向は、次に掲げるような仙人伝記の記述に由来す  
ると思われる。引き続き『列仙全伝』を引用することにす。

『列仙全伝』「木公」には、

木公、諱倪、字君明。（中略）亦号二東王公。凡上レ天下レ  
地男子登仙得道者、悉所レ掌焉。嘗以二丁卯日一登レ台、觀  
望二転劫学道得仙之品。品有レ九。（中略）凡品仙昇天之日、  
先拝二木公、後謁二金母。受レ事既畢、方得レ昇二九天、  
入三清一、礼二太上二而觀三元始一。

『列仙全伝』卷一「木公」

とあり、男子の登仙者を東王公が掌ること、仙人が昇天の日、  
まず木公（東王公）を拝し、後に金母（西王母）に謁し、それ  
を終えると九天に昇れることが記される。『風俗遊仙窟』の文  
生が東王公へ「継目の御礼沙汰もな」との記述は、この記述  
に対応するものと考えられる。

また、『列仙全伝』「西王母」では、

西王母、即龜台金母也。（中略）凡上レ天下レ地女子之登仙

得道者、咸所<sub>レ</sub>隸焉。 『列仙全伝』巻一「西王母」

と、女子の登仙者が西王母の支配に属することが記されている。このように、『列仙全伝』の記述では、男仙と女仙の管理が分かれていること、東王公と西王母が仙人を管理していること、仙界では秩序礼儀が重視されていることが窺われる。このような仙界の規則に関する記述は他文献にも見られる<sup>213</sup>が、対応箇所の数や表現上の一致から考えると、『風俗遊仙窟』に最も近いのは『列仙全伝』である。他の箇所の利用状況をも勘案すれば、『列仙全伝』を利用した蓋然性が高いと考えられる。

『風俗遊仙窟』の作者は、仙人伝記における記述を本書の仙人社会に応用したのである。具体的には、仙人らを叱る役として東王公と西王母を登場させ、西王母に届けを出さず俗間に嫁した不屈きな久米姫を仙人仲間から排除するという筋書きを採用した。

以上に取り上げた巻三の東王公、西王母に関する場面は、巻四において、

ことに東王公西王母の咎めを受。大に気を鬱何となく頽折。いまは仙菓施すに験なく。終にむなく成ぬれば。高祖長樂宮に崩じ。孔明疇筆駢に卒せるごとく。一家の柱礎忽碎け。姫文生の。かなしび譬るにものなし。角て有べきことならねば。頓て遺骸を送葬すべしとて。

『風俗遊仙窟』巻四

のように久米仙人の死と直接に結びつき、諸仙が久米仙人の葬礼を準備する場面や、巻四の過半を占める「釈迦如来の御触書」、「祭久米老仙君文」にも繋がっていく。何より、東王公と西王母の咎めは、文生夫婦が俗界に帰る結末の端緒となっている。

これまで示したように、『風俗遊仙窟』の作者は、仙人伝記の文言を部分的に利用するだけでなく、仙人伝記から読み取った仙界の規則を、本書の仙界に応用し、仙人社会の有り様を描き出したと考えられる。このように創出した仙人社会が、作品の展開の基礎として重要な役割を果たしている。

四 仙境を出る内的要因の設定——作者の思想的立場の反映

文生夫婦が仙境を出るという筋立てにおいて、『列仙全伝』に基づく仙人社会法則の構築はその外的要因をなす。一方、この結末について、本作には文生夫婦の内的要因も描かれている。それについて、本書の巻四における久米姫と文生の会話が注目される。

東王公、西王母から罰を受け、夫婦は共に天竺浪人の身となったが、修行をして再び仙人になることは、まだ可能である。しかし、久米姫は、文生に向かって以下のように述べる。

姫文生にむかひて。「凡女子家に在ては父にしたがひ。人に嫁しては。夫に従ふならはし珍しからず。いま文生のありさま。まつたく仙人の間ケ間ともみへず。うか／＼として暮すうち。つゐ老らくの入相どきにいたりては。悔とも何の益あらん。仮令此のちふたりとも。仙術を修するとも。修行体なれば。一入仙家の掟を守り。五穀魚肉を断物にし。夫婦といふも名斗の木食坊もならぬ所作。髪は荊棘をかき乱し。花の露冠貞香の匂ひにうとく。身には木のはの綴衣着て。千年生ても何かせん。いつそ人間に謫居して。夫婦



借老同穴の契りくちせず。世の月花もおもしろく。詠んにはし。人間界の樂の。短とても五十年には足りぬべし。牝鶏の晨とやらん出過たやうに候へど。はやおもひ立給へ」と。

『風俗遊仙窟』卷四

久米姫は、夫婦の契り、飲食、衣服、雑品のことを挙げ、千年の長寿を得ることよりも、五十年の人間界での生活を選びたいとの考えを示している。また、傍線部の「凡女子家に在ては父にしたがひ。人に嫁しては。夫に従ふならはし珍しからず」は、「在<sub>レ</sub>家従<sub>レ</sub>父、出<sub>レ</sub>嫁従<sub>レ</sub>夫」（『儀礼』「喪服第十一」）という儒教道徳によることは注意される。

右のことを聞き、文生は非常に悦び、

「われらは元來故郷へ歸らん事をおもへども。姫の心をはかりかね。今までことばをのこしたり。過ては改に憚事なかれといへり。凡神儒の道にはづれ。一風かはりしをしへかけ。皆方外の異端なり。人道を尽すが。天地の間に住業にて父母への孝行。五倫のうちにもわけて。夫婦の和愛は。子孫相続の爲にして。関々たる雉鳩の河の洲に。和ぎ鳴けるを。夫婦中のよきに譬へて。聖人も讚給ひぬ。三年父の道をあらためぬを。孝といへどもまた後なきを。不孝の第一とも見へたれば。我々子孫相続し。先祖の祭祠を重くせば。却て今の権道なるべし。いざやもろとも立出ん」と。

仙郷をぬけ出て。『風俗遊仙窟』卷四

のように、元來故郷へ歸りたいと考えていたこと、神道・儒教から外れた教はみな異端であること、人間界で子孫を設け、先祖の祭祠を重んじるべきことを述べ、夫婦ともに人間界に帰ることにした。

傍線部の「関々たる雉鳩の河の洲に」の詩は、『詩経』の第一篇であり、孔子に「樂而不<sub>レ</sub>淫、哀而不<sub>レ</sub>傷」（『論語』「八佾第三」）のように評価される。続く「三年父の道をあらためぬを。孝といへども」は、「子曰、三年無<sub>レ</sub>改<sub>二</sub>於父之道<sub>一</sub>、可<sub>レ</sub>謂<sub>レ</sub>孝矣」（『論語』「里仁第四」）を指す。「また後なきを。不孝の第一とも見へたれば」は、「不孝有<sub>レ</sub>三、無<sub>レ</sub>後為<sub>レ</sub>大」（『孟子』「離婁章句上」）による。このように、文生は、子孫を絶やすのが最も大きな不孝であるため、喪中に父の道（修仙の道）を改めることが、「子孫相続」の目的を達成するに必要な手段であり、結果から見ても正道になつていて、との旨を述べている。

ここには注目すべき点が二つある。一つ目は、仙境に比べ、人間界を好ましいものと捉える考え方である。二つ目は、二人が儒教での聖人の教えを引き合いに出して仙境を出る正当性を説く点である。

まず、久米姫の仙境と俗界の楽しみや優劣に関する言論は、一般的な認識とは異なるようである。一般的な認識として、たとへば、よく知られる仙境訪問譚の「劉阮天台」説話にも、人間界の楽しみに関する仙女の文言がある。

続齊諧記。漢明帝時、永平十五年。剡県有<sub>二</sub>劉晨阮肇<sub>一</sub>、入<sub>二</sub>三天台山<sub>一</sub>採<sub>レ</sub>菓。迷失<sub>二</sub>道路<sub>一</sub>。糧食乏<sub>レ</sub>。望<sub>二</sub>山頭<sub>一</sub>有<sub>二</sub>一桃樹<sub>一</sub>。（中略）又度<sub>二</sub>一山<sub>一</sub>、出<sub>二</sub>大溪<sub>一</sub>。見<sub>二</sub>二女顏容絶妙<sub>一</sub>。（中略）又行<sub>二</sub>夫婦之道<sub>一</sub>。住<sub>二</sub>十五日<sub>一</sub>。求<sub>レ</sub>還。女答曰、「今來至此、皆是宿福所<sub>レ</sub>招、得<sub>レ</sub>與<sub>二</sub>二仙女<sub>一</sub>交接上。流俗何所<sub>レ</sub>樂」。遂住半年。天氣和適、常如<sub>二</sub>二三月中<sub>一</sub>。百鳥哀鳴、能不<sub>二</sub>悲思<sub>一</sub>。求<sub>レ</sub>去甚切。女云、「罪根未<sub>レ</sub>滅、

使<sup>二</sup>君等<sup>一</sup>如<sup>レ</sup>此<sup>一</sup>。更喚<sup>二</sup>諸仙女<sup>一</sup>作<sup>二</sup>弦歌<sup>一</sup>、共送<sup>二</sup>劉阮<sup>一</sup>。  
從<sup>二</sup>此山東洞口<sup>一</sup>去不<sup>レ</sup>遠至<sup>二</sup>大道<sup>一</sup>。隨<sup>二</sup>其言<sup>一</sup>、果得<sup>二</sup>還<sup>二</sup>家鄉<sup>一</sup>。都無<sup>二</sup>相識<sup>一</sup>。鄉里怪異。乃驗<sup>二</sup>七世子孫<sup>一</sup>。云、「伝聞上世祖翁入<sup>レ</sup>山不<sup>レ</sup>出、不<sup>レ</sup>知<sup>二</sup>所在<sup>一</sup>。今乃是既無<sup>二</sup>親屬栖宿<sup>一</sup>、欲<sup>レ</sup>還<sup>二</sup>女家<sup>一</sup>。尋<sup>二</sup>山路<sup>一</sup>不<sup>レ</sup>獲。至<sup>二</sup>太康八年<sup>一</sup>、失<sup>二</sup>二公所<sup>一</sup>在。」  
（応安頃刊五山版『蒙求』中卷）

劉晨、阮肇の二人が仙境に入り、仙女と契るが、帰郷を願う。仙女は、二人に対して、ここに來ることができたのは宿福によるものだと述べ、俗世に何の楽しみがあるか（楽しみはない）と勧告する。この場面からも見られるように、仙境は、俗世の人間の憧れの対象となる、理想的な世界と視されている。劉晨、阮肇がその後、一度故郷に帰るものの、再び仙境に戻ろうとすることも、その傍証となりうる。

なお、仙境訪問譚ではないが、仙人が人間界に赴く類話が存在する。たとえば新聞一美「白居易の長恨歌——日本における受容に關連して」<sup>(11)</sup>によると、日本で流布した「長恨歌」に付される序文、鎌倉時代頃成立の「長恨歌序」には、楊貴妃は元々仙人であるが、唐玄宗との恩愛のため、下界に謫居して、夫婦となったという内容がある。このように、楊貴妃説話において、仙人が人間界に居留する要因は、男女の愛情である。『風俗遊仙窟』と楊貴妃説話の両者には、共通点はあるものの、相違点もある。久米姫は仙家の掟を批判的に捉えており、飲食、衣服、雑品のことも挙げていたためである。つまり、男女の愛情という一面のみならず、仙境での生活全般におけるきまりが、仙境を出る要因となる点が、『風俗遊仙窟』の特徴的な点である。

次に、儒教的な論理に基づく帰郷理由も、あまり一般的ではないように思われるが、このように判断するには、同じ話型の作品の帰郷理由を確認しておく必要がある。

『風俗遊仙窟』刊行以前の日本中世期、近世期における仙境訪問譚では、仙境と俗界の優劣や主人公の去留問題、帰郷原因に關する様相は、どのようになっているのか。仙境訪問譚の数が少ないため、調査範囲を竜宮、鬼国などの異郷全般にまで拡大し、『風俗遊仙窟』と同様に「男性の人間が異郷に入り、美女と契る」構想を持つ作品、つまり婚姻要素を有する異郷訪問譚を確認した。なお、婚姻との要件を設ける理由は、異郷に入っただけのものと異なり、婚姻という絆で主人公が異郷に残ることが可能となり、去留の問題が自然に生じてくるためである。

確認対象について、前掲拙稿にまとめた異郷訪問譚を有する仮名草子（作品十四点、二十二話）、浮世草子（作品三十二点、五十二話）に加え、徳田和夫編『お伽草子事典』<sup>(12)</sup>所収の作品も対象とした。『風俗遊仙窟』刊行以前の中世、近世のあらゆる異郷訪問譚を網羅した調査ではないが、大まかな傾向を把握する上では有効であろう。

調査方法について、仮名草子・浮世草子は前掲拙稿にまとめた該当話の本文を通読し、御伽草子は事典を参照して異郷訪問譚を特定し、本文を確認した。その結果を表二、表三にまとめた。

表二 御伽草子における婚姻要素を有する異郷訪問譚

【凡例】

1. 作品は可能な限り成立順に配列したが、成立年代の推定範囲が広いものが多いため、前後する場合がある。
2. 「●」は、その要素が作品に見えることを示す（以下同様）。
3. 『室町時代物語集』を『物語集』、『室町時代物語大成』を『大成』、『日本古典文学大系』を『大系』、『幸若舞曲研究』を『幸若』、『西ベルリン本御伽草子絵巻集と研究』を『西ベルリン本』と略称する。

番号	作品名	主人公の去留		人間界に帰る場合		場所	備考	底本
		主人公は帰る	去る	主人公は帰る意思を持つ	帰る原因			
①	『諏訪録起物語』寛延二年写本	帰る		●	故郷が恋しいため・故郷の妻を夢に見たため。	地下の国		『物語集』二
②	『貴船の本地』承応明曆頃刊丹緑本	帰る			鬼の大王に殺されるので、帰るように姫に説得されたため。	鬼国		『大成』四
③	『浦嶋太郎』渋川版	帰る		●	父母を恋しく思うため。	竜宮	浦嶋太郎は一時帰ることを乞う。	『大系』三十八
④	『地藏堂草紙』桜井慶二郎氏旧蔵絵巻	帰る		●	妻の蛇尾のような裾を見、ここが竜宮であると知り、気疎く思ったため。	竜宮		『大成』補遺二
⑤	『畠山』内閣文庫蔵近世後期写本	一旦帰るが、異郷に		●	九穴の目を求める目的を達成したため。	竜宮		『幸若』二
⑥	『月王乙姫物語』ベルリンプロシヤ文化財団国立図書館蔵絵巻	一旦帰るが、異郷に		●	故郷の父母を恋しく思うため。	竜宮	月王丸は最後に竜宮に戻って竜王となる。	『西ベルリン本』
⑦	『かくれ里』(別本)赤木文庫蔵絵巻、寛文・延宝頃写	一旦帰るが、異郷に		●	故郷が恋しいため・老母幼子に会うため。	仙境	劉阮天台の故事を踏まえ、二人が一時帰ることを願って帰郷するが、再び仙境に戻る結末を持つ。	『大成』三

表三 仮名草子・浮世草子における婚姻要素を有する異郷訪問譚

【凡例】

1. 『仮名草子集成』を『仮名』、『西村本小説全集』を『西村』、『叢書江戸文庫』を『叢書』、『八文字屋本全集』を『八』、玉川大学教育学術情報図書館蔵寛保三年刊本を「玉川大学蔵本」と略称する。

番号	刊年	作品名、作者	該当巻	主人公の去留	主人公は帰る意思を持つ	人間界に帰る場合	帰る原因	場所	備考	底本
①	寛文六年 (一六六六)	『御伽婢子』 浅井了意	巻八の一	帰る			蝦の国であると知ったため。	蝦の国	竜神の使いによって本国に送られる結末は、原話「大足初有士人」に同じ。主人公が帰る意思を持つかどうかは不明。	『仮名』七
②	元禄十一年 (一六九八)	『怪談全書』 林羅山	巻一の五	帰る	●		主人公を故郷に帰し、親類に対面させるべきだと、他人が玉に進言したため。	蟻の国	王に故郷に帰されたところで夢が覚める結末は、原話の淳于禁の故事に同じ。	『仮名』十二
③	貞享三年 (一六八六)	『浅草拾遺物語』 西村市郎右衛門	巻三の二	帰る	●		既に島のすべての女に会い尽くしたためか。	女護の島		『西村』下
④	元禄十七年 (一七〇四)	『多満寸太礼』 辻堂非風子	巻四の二	一旦帰る			竜田姫が「心にまかせぬ天帝の命なれば」と述べたため。	山、山神、関係	天帝の命により一旦帰されるが、竜田姫の教えに従い、再び戻って竜田姫に再会し、別の場所(洞)で修行し、再び人家に帰らない。	『叢書』三十四
⑤	正徳三年 (一七一三)	『和漢乗合船』 落月堂操庵	巻六の二	帰る			異人に救い出されたため。	狐の「大家高殿」	異人に救い出されたから、大家高殿が妖狐の誑かしたと知る。	『叢書』三十四
⑥	元文五年 (一七四〇)	『竜都儀系図』 多田南嶺	巻四の一	帰る			帰郷して一門に對面するよううに、王から命じられたため。	蟻の国	王に故郷に帰されたところで夢が覚める結末は、原話の淳于禁の故事に同じ。	『叢書』三十五
⑦	元文六年 (一七四一)	『怪談はらつづみ』 頓口軒	巻二の一	帰る	●		処刑され、夢が覚めたため。	竜宮	浦島太郎の子孫ではないことがばれ、処刑を受けて反省したところ、夢が覚める。	『八』十五
⑧	寛延元年 (一七四八)	『盛久側柏葉』 多田南嶺	巻五の一	残る			妻子に分かれを告げたため。	仙境	村人に引き留められたため、竜宮に戻らなかつた。	『八』十八

表二、表三に見られるように、異郷に入った主人公が、異郷の美女と契つたものの、人間界に「帰る」結末を持つ作品は、「一旦帰るが、異郷に戻る」や「残る」結末を持つ作品に比べて多い。

ただし、主人公が人間界に帰る意思を持つかどうか、また、帰る原因については、御伽草子と、仮名草子・浮世草子とは、異なる様相を呈している。

まず、御伽草子(表二)については、完全に帰るか一旦帰るかに関わらず、帰る行為が主人公の意思によるものが殆どである。帰る原因として、童宮を恐ろしく思う一例(表二④)は存在するが、比較的多いのは望郷の念による例(表二①③⑥⑦)である。望郷の念は、人間界を異郷より優れたものと見なしてのものではなく、故郷の家族への思いから生じるものである。これは作品本文における「ふるさとの春日の姫の、夢に見えて候とのたまへば」(表二①)、「父母の御事を心もとなく候へば、あひ奉りて、心やすく参り候はん」(表二③)、「われ、このせかいにきたりつゝ、む上のたのしみをきはむといへども、こきやうにおはします、ちゝはゝの御事、おぼつかなく、おもへば」(表二⑥)、「いまたび、かへりて、おひたる母、いとけなき、こどもなどに、あふて、よくく、いとまこいして、又こそ、まいり侍らめと、申ければ」(表二⑦)から判断できる。

一方、仮名草子・浮世草子(表三)については、主人公が元の世界に帰る意思を持つ作品は少ない。帰る原因は多様だが、異郷の人物に帰郷を命じられたため(表三②④⑤)、救い出されたため(表三④)、処刑を受けて夢が覚めたため(表三⑥)など、外的要因によるものが多い。ここには、主人公が元の生

活に比して異郷での生活に満足している可能性が窺える。

以上より、『風俗遊仙窟』において、人間界での生活を仙境でのそれよりも好ましいものと捉え、儒教的な論理を引き合いに出すことで帰郷の理由とすることは、先行する異郷訪問譚とは異なり、本作の特徴と言える。

この現象については、中国の神仙説話の状況を確認すると、『列仙全伝』を含む中国神仙説話に見られるのは、儒教道徳を守ることで成仙する<sup>(二十四)</sup>という、『風俗遊仙窟』とは正反対の例である。

『風俗遊仙窟』の主人公が儒教の倫理道徳を理由に仙境を出る(または仙人になることを断念する)という構想は、作者の思想的立場によるものではないか。

『風俗遊仙窟』の作者克齋は、自跋において、  
夫神仙の為レ術也。以レ怪異一欺レ暗。以レ幻誑レ俗。今も賤丈夫が。飲レ劍梯子を鼻頭に立る類にして。漢王唐帝。千歳の笑ひを。残されし物語とかや。『風俗遊仙窟』跋)のように、神仙の術が、愚かな俗人を誑かすものであると述べる。黒羊子による序文の記述とは必ずしも整合しないが、作者の態度を考える上で見逃し難い記述である。

また、克齋著『蛙の物真似』にも、

我國の神道、もろこしの儒道にはづれたる教は。釈尊、達磨、老子、莊子、列子、楊墨子の類まで。逸狂偏僻にして。

『蛙の物真似』巻二)

のように、諸教に関する論述がある。傍線部における老子、莊子、列子、楊子の部分は道家に該当する。この部分は道家の批判であり、神仙思想のみを対象とした論述ではないが、前掲『風

俗遊仙窟』卷三の西王母の発言に、「凡修<sup>レ</sup>仙者。黄帝老子を

祖とし」とあるように、作者は老子を神仙道教の始祖と捉えている。克齋が老子・莊子・列子などの教えを、日本の神道、中国の儒教から外れたものとして挙げ、批判対象としたことは注意される。

神儒を重んじる克齋の考えは、日本の人間界を仙境より好ましいものとする。『風俗遊仙窟』の記述と軌を一にする。作者が成仙譚の類型と反対の独自の結末を設定したのは、このような思想的立場の反映であると考えられる。また、克齋は素材を無批判に利用したのではなく、自らの主張を効果的に示すために取捨選択しているようである。これは、彼が儒教要素のある成仙譚を利用しなかつたことから察知できる。

このように、『風俗遊仙窟』の主人公が俗界に帰る原因について、西王母の咎めという外的要因を設定するだけではなく、作者は、殊更に主人公の内的要因が結末に影響を与えるように工夫して書いている。これを通じて、作者は「我国の神道、もろこしの儒道」を重視すべきとの主張を示そうとしたのではないか。

以上に述べたように、『風俗遊仙窟』は、異郷を出る主人公の内的要因が、日本における同型の異郷訪問譚と異なっており、そこには、仙境を否定し、儒教を肯定する作者の主張が作用している。仙境訪問譚で儒教を主張するという創作姿勢や、批判すべき思想に基づく書物を構想上も表現上も広く利用しながら批判する、という典拠の利用方法は、本作の特色である。『風俗遊仙窟』を通じて、異郷訪問譚の一変化が見られる。

## 五 おわりに

本稿では、『風俗遊仙窟』における仙境訪問譚の様相を検討した。『風俗遊仙窟』が作中に仙人社会を作り出したことは、従来の一般的な仙境訪問譚と異なる特徴であり、その仙人社会法則の構築において、中国の仙人伝記が大きく関与したことを示した。また、人間が異郷で美女と婚姻を結んだものの、人間界に帰るといふ結末については、多数の同型作品がある一方、その原因（西王母の咎め、人間界を優れたものとする態度、儒教理論の遵守）については、本作は独自性を示している。本作から、中国仙人伝記の受容の具体的様相だけでなく、異郷訪問譚の内容がどのように作者の思想的立場や価値観に従って変化を遂げていくのか、儒教の教理がどのように仙境小説に影響しているのか、その一隅を洞察できる。

『風俗遊仙窟』を通じて、異郷訪問譚の変化の断面を窺い知ることができたが、『風俗遊仙窟』以降の異郷訪問譚の様相はどのようなか。既に影響作として指摘される富川吟雪画の青本『風流仙人花聳』では、仙人社会の法則について、西王母を登場させ、仙人を警戒させる筋書きが継承される。また、主人公が人間界に帰る原因は、仙術より銭術が絶妙であることを悟ったためである。修仙ではなく、銭を重視して俗界を楽しむ結末は、現実主義的な態度において『風俗遊仙窟』と同趣である。また、従来影響作としては指摘されないが、黄表紙『金々仙人通言一卷』（富川吟雪画作、安永五年（一七七六）刊）には、主人公が琴高仙人の娘と契り、後に仙界から追い出される内容がある。この構想も『風俗遊仙窟』に類似しており、『風

俗遊仙窟』から示唆を受けたものであろう。この二例に限らず、『風俗遊仙窟』より後には、多数の仙人を描く作品や、中国仙人が日本に登場する作品、仙人智譚が増えている(明和十年刊、閑鶯斎著の浮世草子『俄仙人戯言日記』、寛政元年刊、山東京伝作、北尾政美画の黄表紙『艶哉女仙人』など)。異郷訪問譚の変遷の様相と、そこに『風俗遊仙窟』や仙人伝記集が果たした役割のさらなる説明は、今後の江戸時代中後期における作品の網羅的調査によって期待できると思われる。

[注]

- (一) 勝俣隆『異郷訪問譚・来訪譚の研究』(和泉書院、二〇〇九)。
- (二) 市古貞次『異郷小説』(『中世小説の研究』東京大学出版会、一九五五)。
- (三) 拙稿『風流志道軒伝』における仙境描写——異郷訪問譚の系譜を視座として(『京都大学国文学論叢』四十九、二〇二二)。
- (四) 『風俗遊仙窟』の刊年について、小林勇『風俗遊仙窟』解題(『京大文学部国語学国文学研究室編、京大文学蔵大惣本稀書集成第二巻』談義本 滑稽本) 臨川書店、一九九四)と、中野三敏『静観房まで——談義本研究(五)』(『戯作研究』中央公論社、一九八一)によると、本書には寛延二年の刊年を有する伝本と刊年不明の伝本があるが、『割印帳』には、寛延二年の記録以前に、享保十七年(一七三二)、同十八年の記録もある。
- (五) 浅井了意著『御伽婢子』や、井原西鶴著『西鶴諸国ばなし』など。
- (六) 多田南嶺著『盛久側柏葉』など。
- (七) 注(四) 小林氏前掲解題。

(八) 注(四) 中野氏前掲論文。

(九) 注(四) 小林氏前掲解題。

(十) 中村幸彦校注、日本古典文学大系『風来山人集』(岩波書店、一九六二)「解説」が、『風流志道軒伝』と『遊仙窟』との関連を示す中で、『風俗遊仙窟』の書名にも言及する。注(三) 拙稿は、平賀源内が『風俗遊仙窟』を直接参考にした可能性を示した。

(十一) 注(四) 中野氏前掲書。

(十二) 注(四) 中野氏前掲論文は、黒羊子は後藤梨春と推定する。

(十三) 『列仙全伝』の編者、序者はそれぞれ「王世貞」、「李攀竜」と記される。これらが書賈による仮託であることは、鄭振鐸『中国古代版画叢刊(三)』(上海古籍出版社、一九八八)などに指摘がある。

(十四) 仙人数の情報を含め、『列仙全伝』に関する研究は、佐藤義寛『列仙全伝』研究(一〜二二)『文芸論叢』五十九、六十、六十二〜六十四、六十六、六十八〜七十一、七十三、七十五、二〇〇二〜二〇一〇)がある。

(十五) 日本への伝来について、蓬左文庫所蔵本が「元和末年買本」であることが知られている(嚴紹璽『日藏漢籍善本書録』中冊、中華書局、二〇〇七)、『列仙全伝』の出版年は万暦二十八年であるため、本書の日本への伝来は一六〇〇年から一六二四年までの間とすることができよう。

(十六) 前野直彬解説『山海経・列仙伝』(集英社、一九七五)を参考にした。

(十七) 先行研究と受容例を、拙稿『風流志道軒伝』における仙人伝記の利用(『国語国文』九十二〜三、二〇二二)の注に列挙した。ここでは重複を避けるために再掲しない。

(十八) 陶朱公 (范蠡のこと) について、『列仙伝』の該当本文は「為<sup>レ</sup>陶朱君<sup>一</sup>、財累<sup>二</sup>億万<sup>一</sup>、号<sup>二</sup>陶朱公<sup>一</sup>。複製<sup>レ</sup>之、蘭陵売<sup>レ</sup>葉」である。『風俗遊仙窟』における「陶朱公は。億万の財をすて、蘭陵に葉を売」と類似する表現が『列仙伝』『列仙全伝』の両作にあるため、どちらの利用か判断しにくい。

(十九) 『和漢三才図会』における『風俗遊仙窟』との対応箇所は、左慈伝 (表一②) の一箇所のみである。

(二十) 表一③における『風俗遊仙窟』の本文は、東王公と西王母が登場する場面である。表一⑧における『風俗遊仙窟』の本文は、仙道が達成されると、どのようになるのかについて、西王母が述べた場面である。しかし、『列仙全伝』には両者の登場は描かれておらず、西王母の発言も見あたらない。『風俗遊仙窟』の内容は、東王公・西王母に無関係な『列仙全伝』「茅盈」と「劉安」の項目における表現を借りたものである。

(二十一) 西王母が女仙を管理すること、仙人が昇天の時、木公と金母に拝謁することは、既に中国唐代の女仙伝記集『墉城集仙録』「金母元君」に見られる(「女子之登仙得道者、咸所<sup>レ</sup>隸焉(中略)然其昇天之時、先拜<sup>二</sup>木公<sup>一</sup>、後謁<sup>二</sup>金母<sup>一</sup>。受<sup>レ</sup>事既訖、方得<sup>レ</sup>昇<sup>二</sup>九天<sup>一</sup>、入<sup>三</sup>三清<sup>一</sup>、拜<sup>二</sup>太上<sup>一</sup>、觀<sup>三</sup>奉<sup>二</sup>三元始天尊<sup>一</sup>耳)。しかし、東王公が男仙を管理する叙述は本書にない。

東王公が男仙を管理することを記した漢籍で、「上天下地」、「男子」の表現を含むものは、表一④で示したように、『列仙全伝』と『三才図会』の両書である。『三才図会』の該当本文は「東王公、諱<sup>レ</sup>倪、字君明。(中略)亦号<sup>二</sup>東王公<sup>一</sup>。凡上<sup>レ</sup>天下<sup>レ</sup>地男子登仙得道者、悉所<sup>レ</sup>掌焉。(中略)嘗以<sup>二</sup>丁卯日<sup>一</sup>登<sup>レ</sup>台、觀<sup>二</sup>昇<sup>一</sup>、轉劫昇天之仙」。凡有<sup>二</sup>九品<sup>一</sup>。然始昇之時、先拜<sup>二</sup>太公<sup>一</sup>、後謁<sup>二</sup>金

母<sup>一</sup>。受<sup>レ</sup>事既畢、方得<sup>レ</sup>昇<sup>二</sup>九天<sup>一</sup>、入<sup>三</sup>三清<sup>一</sup>、礼<sup>二</sup>太上<sup>一</sup>而觀<sup>二</sup>元始<sup>一</sup>」である。「先拜木公」とあるべき箇所が誤刻され、「先拜太公」となっている。

(二十二) 新聞一美「白居易の長恨歌——日本における受容に関連して」(『平安朝文学と漢詩文』、二〇〇三)。

(二十三) 徳田和夫編『お伽草子事典』(東京堂出版、二〇〇二)。

(二十四) 梅新林「仙話 神人之間的魔幻世界」(三連書店上海分店、一九九二)には、神仙道教の教理について、中国晋代の葛洪著「抱朴子」における「欲<sup>二</sup>求仙<sup>一</sup>者、要<sup>二</sup>当下<sup>一</sup>以<sup>二</sup>忠孝和順仁信<sup>一</sup>為<sup>レ</sup>上<sup>一</sup>本。若<sup>レ</sup>徳行不<sup>レ</sup>修、而但務<sup>二</sup>方術<sup>一</sup>、皆不<sup>レ</sup>得<sup>二</sup>長生<sup>一</sup>也」が引用され、

儒教の学説が神仙道教の理論に与えた影響が示される。また、神仙説話について、道徳を重視する文化に適應するために、神仙家は儒教における倫理綱常を神仙説話に援用すること、具体的には賢君、忠臣、良民、節婦のような道徳的に高尚な人が成仙したり、神仙に助けられたりする話が創作されたことが指摘される。

また、筆者の調査によると、このような説話は『列仙全伝』にも存在する。たとえば巻四「蘭公」には、孝子である蘭公の前に、孝悌王という真人が降下し、彼に仙術を授ける内容がある。

#### 〔付記一〕

本文の引用は、特に断らない限り、『風俗遊仙窟』は京都大学文学部国語学国文学研究室編、京都大学蔵大物本稀書集成第二巻『談義本滑稽本』(臨川書店、一九九四)、『有象列仙全伝』は京都大学附属図書館所蔵の慶安三年刻本、『列仙伝』は全釈漢文大系『山海経・列仙伝』(集英社、一九七五)、『墉城集仙録』は「杜光庭記伝十種輯校」(中華書局、二〇一三)、『三才図会』は万曆三十七年刊本(国立



国会図書館デジタルコレクション所載画像による、『儀礼』は『儀礼注疏』（上海古籍出版社、二〇〇八）、『論語』は新釈漢文大系『論語』（明治書院、一九六〇）、『蛙の物真似』は岐阜大学図書館所蔵の享保十四年刊本（国文学研究資料館「国書データベース」所載画像による）によった。引用に際して、旧字体を新字体に改め、私に句読点、濁点などを付したところがある。『風俗遊仙窟』における割注は、山括弧で示した。『有象列仙全伝』の訓点は、和刻本によりながら、返点のみ記した。なお、現在の漢文訓読方法に従い改めた箇所がある。

〔付記2〕

本稿は、和漢比較文学会令和二年西部例会（於キャンパスプラザ京都、二〇二〇年十一月）の口頭発表「江戸時代における『有象列仙全伝』の利用」の一部をもとに作成したものです。発表の際に御教示を賜りました先生方、「長恨歌序」について御教示を賜りました新聞一美先生に深謝申し上げます。

（ふぎょうれい・本学研修員）